

風土



雪 菩 薩
神 蔵
器

初 日 さ す 桂 郎 山 河 わ が 山 河

初 日 受 く 八 十 七 歳 い ま 生 き て

的 射 ぬ く 音 一 つ し て 弓 始

初 夢 の た か ら く じ と ぞ 買 は ざ り き

煤 逃 げ や 太 陽 釣 つ て 水 釣 つ て

常口の長き茶垣に金の蕊
五臓六腑寒九の水の貫けり
「袖隠」無心てふ茶を賜ひけり
頬白の「一筆啓上」囀れり
明史恋ふ鳴るか鳴らぬかひよんの笛
天よりのたより十月桜咲く
不意うちの葱鉄砲や桂郎忌



笹鳴の三分灯る寝釈迦かな
鷹放つわが放鳥の午前九時
越冬の紋白蝶か初蝶か
筆休眼に梅花藻と機関銃
左義長や一年生が火を放つ
酷寒やふくみて白き鎮痛剤
寒椿鎮痛剤の効くを待つ

寒明くやぬき足さしあし猫とんで

七草の芽生えずにある名札立つ

二ん月や大きく使ふ竹箒

一ときのハワイ・コナーや寒の明く

てのひらに太陽いつぱい良寛忌

声かけて庭石一つ雪菩薩



竹間集

同人作品



湖東ゆく

田村すゝむ

相年の傘寿陛下の誕生日
雪虫や越後の海の曇りぐせ
石路咲くや談志忌は又芝浜忌
命ある限り詩詠む石路の花
遠ざかるものに妻の忌雪降り出す
湖東ゆく一山一塔冬紅葉
大樽を転がして来る師走かな

まくらがり

瀬戸

悠

冬鴟や柱時計に落暉あり
流木に鈍彫マリア冬ぬくし
鍋焼や焼麩歯ごたへなかなかに
諸手もて柚子湯の柚子胸に寄す
鶺鴒鳴く旅の日暮は母恋し
削ぎ落す鶏の脂や日短か
葉喰隣の部家のまくらがり

春近し

塩田

博久

行きがけに出すぐみ袋初氷
冬日差す席から埋まる始発駅
離れてはまた寄る鉄路日の短か
焼芋や子らに戦後の日々なくて
波音聞く水仙の香の日溜りに
参道に耶蘇説かれをり初詣
柴又に飴切る音や春近し

冬青き

田中佐知子

冬青き蓬や丹後国分寺
枯野中礎石へ道の拓かれて
枯野中礎のごとく礎石あり
埋るるもありにし礎石冬の蝶
野路菊のひと群残る枯野かな
枯野中忽と休み田ありにけり
短日の葬送の鉦風に乗る

初夢

工藤ミネ子

胡桃買ふ奥羽の山の道の端
霜晴や幼稚園バス唱つれて
青き菜を束ね地べたに霏市
雪起し空かきまげて居座れる
数へ日の動くともなく松に雲
雪の嵩頭上注意の旗隠す
初夢の吾子を抱きし重さ手に

日の柱

柴田久子

漱石の墓を抜けきて笹子鳴く
短日の床に立てかく未完の絵
犬入れて鞆のゆがむ三の酉
着ぶかれて我ら老人入園券
冬あたたか水の中にも日の柱
大根引きけもののごとく提げ歩く
冬木立影も四角に横綱碑

忘年会

中村洋子

襟立てて踏み出す一步師走風
マスクして後ろより声かけらるる
下足札「い」の五番なり忘年会
引き出しの奥の引き出し初雪す
冬林檎ダンテの『神曲』地獄篇
冬田打ち遠きひとりも帰りけり
裸木となりて水音のぼりゆく

春の雪

田村すゝむ

寒き病棟曲れば集中治療室
日短かの病廊行つたり来たりかな
小春日の患者溜りの昼下り
点滴二つ競ひて落ちる十二月
寝て覚めて夢は湖東の冬紅葉
小春日や「いかがですか」とナースの手
辞世の句を創りては消す春の雪
ひと時を浄土明かりに春の雪
春雪や片付けてゐる身の回り
すがりゐて柱の太る春の雪
音もなく湖渡り来る春の雪

山河集

同人作品



神蔵
器選

走り根の歌乃中山小春かな

奥山茶々

冬芽立つ桜の元の要石

山茶花や小督乃局の供養塔

冬の椋八条大路の空奪ふ

短日のカラヤン広場に待ち合はす

時間空間光が動くマスクして

根岸善行

太陽が日輪となる冬の暮

眼鏡拭き雲の窓を拭きにけり

美しき空を日渡る冬至かな

蠟燭を消して匂ふやクリスマス

括らんと抱へし菊のぬくみかな

落葉して全山の黙始まれり

駅長の指呼の彼方に冬の虹

高村金子

矩日や期日ある文出しそびれ
読めぬ字の並ぶカルテや神無月

不泡の楳蓮

鴨来るうてなの水を転ばせて

深刻な話になりてマスクとる

石路の花明るし大観旧居かな

句碑どかと坐る岬や野水仙

数へ日の旅にあらねど海を見に

落谷紺代

大枯野後ろにまはし男体山

試し刷る版画のかすれ十二月

宝物や尚蔵館の冬桜

愛用の筆の名小春賀状書く

国道の246沿ひ師走めく

仙田孝子

◇特別作品◇(抄)

一月日捲り

松崎 雨休

目覚めれば今日に出あへるお元日
九十九里潮みがきあぐ初日かな
初夢に海原翔けてをりしかな
立願を報告にかへ初詣
八十の妻の初釜客一人
飲み薬五色五粒に寒の水
衣脱げばただの生き物初朝湯
飾り気の一点もなし冬木立
藪柑子歩くこととは生きること
筋力つくメニュー眩しき春隣

風土集



神蔵器選

山の鳥里の鳥なき一茶の忌 伊東 吉永すみれ

死はいつも近くにありて冬銀河

竜の玉瑠璃光如来は秘仏にて

木のポスト奥に木の家冬灯す

真つ直ぐに来る晩年や冬雲雀

鉄骨の上を人ゆく師走かな 川崎 内藤 静

湯豆腐や大山祇神の水を引き

ポケットに納まるほどの熊手買ふ

旦那衆の力の木遣 西の市

F M の武満 徹聖 夜くる

マスクして地下三番の出口出づ 東京 柿沼 盟子

冬薔薇咲く築地場外 具屋かな

バス停の白き灯や寒波来る

やはらかく白息こぼし月曜日

黒革の手袋に受く銀貨かな

落葉踏む坂は山盧に行き止まる 東京 林 いづみ

本尊は秘仏牡丹の冬芽立つ

霜晴れや南アルプス立ち上がる

昼は鋸引きし手夜は賀状書く

一枝は袋に囲ふ 実南天

懐かしき人より着信冬桜 相模原 岡本 尚子

どの窓も幸せさうな聖夜かな

金銀の星の深さよ初御空

伝ひ来るレールの響き初明り

初旅や湖に降る雪眺めつつ

木の瘤に注連を回して十二月 三鷹 布施まさ子

山眠るこけしの里の囲炉裏端

冬日向うしろに母のあるやうな

水音に暮れゆく寺の実干両

木の葉散る櫻の樹令七百年